

青いやナギ

作 藤原富美枝・訳 矢野 真・絵



933	ド	リス・ゲイツ はぎわら ふ み え
	ド	リス・ゲイツ作(菰原富美枝訳) 青いやナギ 太 平 出 版 社 1975 218 P 22cm

菰原富美枝 はぎわら ふ み え 1926年甲府に生れる。1947年東京女子大学国語科を卒業。翌年、慢性多発性関節リウマチにかかる。1971年茨城県立リハビリテーションセンターに入所し、機能回復訓練を受けるかたわら、翻訳の勉強に精進している

青いやナギ 母と子の図書室 4年生～中学生

1975年4月25日 第1刷発行 ￥ 1100

著 者 ドリス・ゲイツ

訳 者 菰 原 富 美 枝

発 行 者 崔 容 徳

発行所 東京都千代田区西神田1-2-15 石合ビル
株式会社 太 平 出 版 社 ©

TEL 291-9477・9752 294-7083 振替東京99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

道野整版・加藤印刷

青いやナギ

作 籾原富美枝・訳 矢野 真・絵





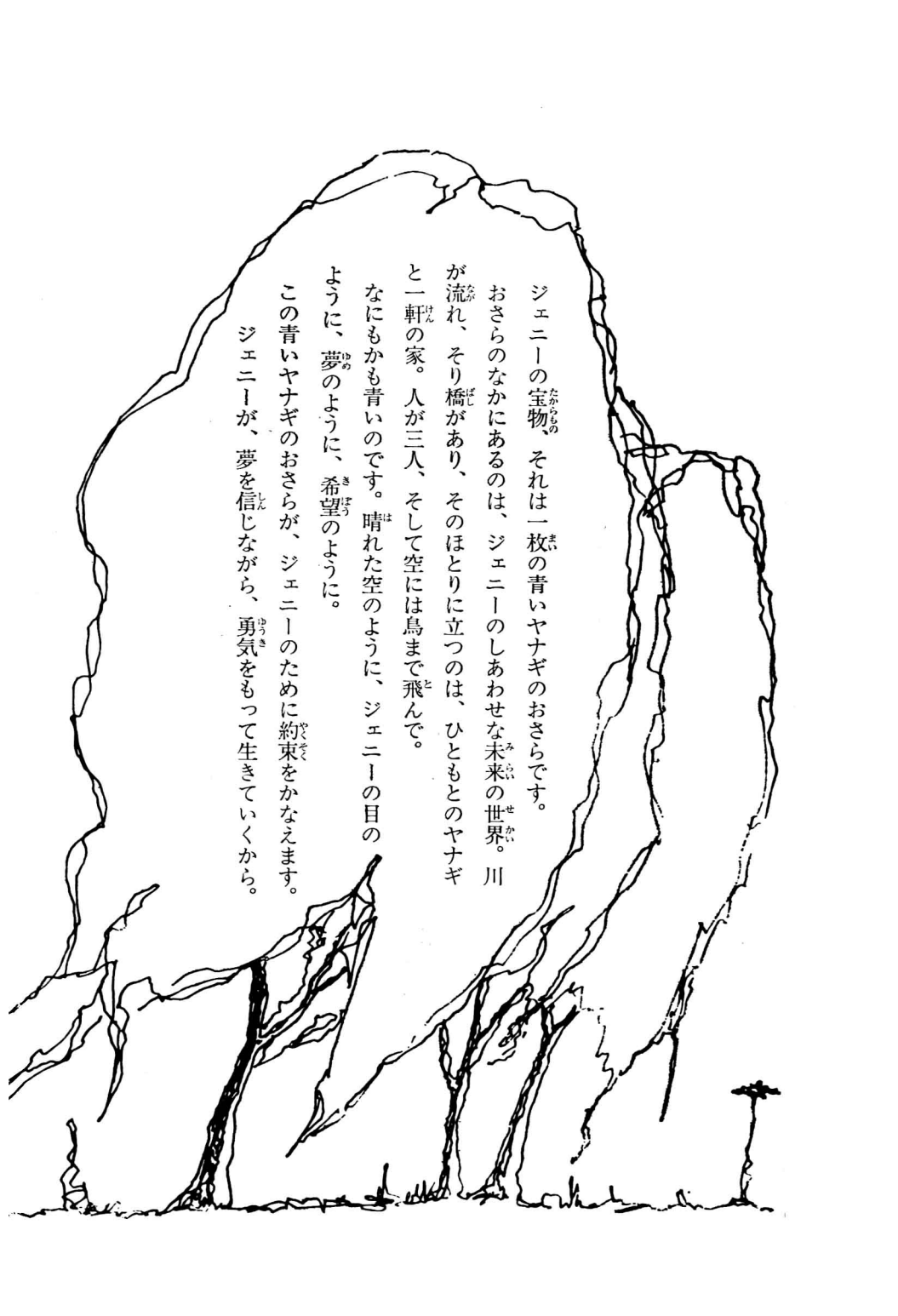
原书空白

原书空白

青いやナギ

D・ゲイツ・作 蘿原富美枝・訳 矢野 真・絵



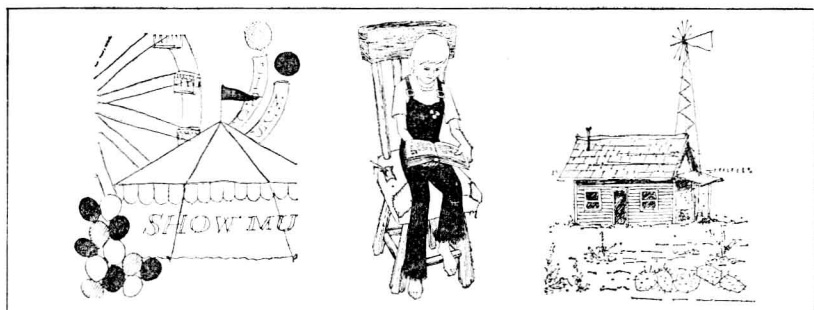


ジェニーの宝物、それは一枚の青いヤナギのおさらです。

おさらのなかにあるのは、ジェニーのしあわせな未来の世界。川が流れ、そり橋があり、そのほとりに立つのは、ひともとのヤナギと一軒の家。人が三人、そして空には鳥まで飛んで。

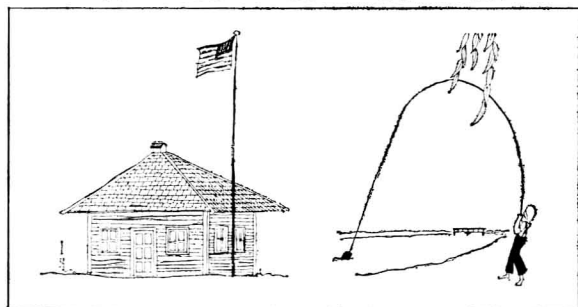
なにもかも青いのです。晴れた空のように、ジェニーの目のように、夢のように、希望のように。

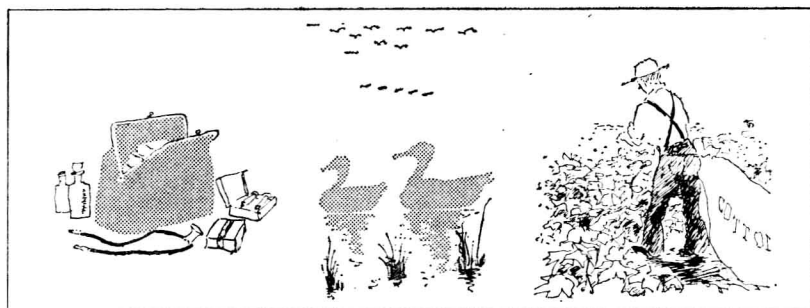
この青いやナギのおさらが、ジェニーのために約束をかなえます。ジェニーが、夢を信じながら、勇気をもつて生きていくから。



青いやナギ もくじ

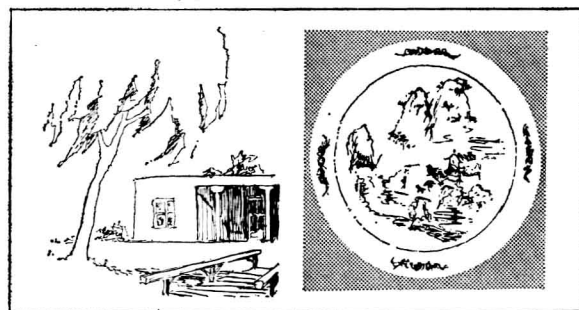
6	5	4	3	2	1
競技会	ミラー分校	ジェニー、絵のなかにはいる	郡の共進会	いられるかぎり	堀立小屋
.....					
115	99	71	50	36	12





解	訳者あとがき	10	9	8	7
説		いた	ヤナギのおさら	もつと心配なこと	野鳥の群と心配ごと
.....		だけ			
村	穂原富美枝	ず			
上		つ			
光彦		と			
207	205	186	168	151	134

編集 塩沢はつ子





青いヤナギ

D・ゲイツ・作

種原富美枝・訳 矢野 真・絵

1 掘立小屋

ジェニー・ラーキン は掘立小屋の戸口まで出ると、ちょっと立ちどまって、階段のいちばん上の板にうつるじぶんの影を見おろした。いま、影はとても短い。十才の女の子にしては背の低いジェニーだけれども、それにしても寸のつまった影だった。足もとにちぢこまった濃い黒い影はほんの申しわけばかり、小さなしみかなんぞのようで、ひび割れた踏み板のはしまでもとどいていない。ちょうどま屋どきで、太陽は頭のま上に白くきらきらと燃えて、ジェニーも、小屋も、まわり一帯に何キロもつづく平地も、みんな灰にしてしまいそうないきおいだった。暑い。すぐく暑い日だ。両手をおわんのようにまて、汗ばんだ手のひらにジェニーが息を吹きかけると、その息のほうが、吸っている外気よりもまだひやつこく感じるくらいだった。

それでも、ここは外だからまだましだったのだ。ひとへやきりの小屋のなかは、むうつとして息もつ



けない。太陽が、これでもかこれでもかと熱しあげたところへ、まきストーブまでたいていたのだから。それに、この戸口へ出ると、かげろうがちらちらゆれている西の方が見わたせたからだ。かげろうの向こうには山なみがのびて、さらにその山の向こう側には青い外海が開けているはずだった。もっともこの季節には、熱気でおおいかくされて、山なみは峰ひとつ見えなかったけれども。どっちみち山はとも遠い。それに高く立ちはだかっていたから、この広いいりなべの底のようなサン・ホーキン盆地までは、ひとそよぎの海風もたどりつけなかったのだった。でも、けさはやく、うちじゅうでここへ車できるとちゅう、お父さんは、西には広い海があるんだよ、と教えてくれていた。それでいま、ジェニーはいちばん上の段にものうげにうずくまると、背なかをまるめて、海のことを思い心をなぐさめようとしていたのだ。ここに腰かけていると、そのすがたはとても小さく、いかにもさびしうに見えた。すわっているせいもあって、影もからだの下に消えてしまいそうなほどにちぢまり、ジェニーはただひとり、この暑さのなかに放りだされたかたちだった。

道をへだてて、つの掘立小屋があった。それは、ラーキン家の人たちがかりの住居ときめたこの小屋よりもいくらか大きく、ずっとがっしりして見えた。そこにロメロさんというメキシコ人の一家がジェニーはもう知っていた。けさここへ着いて間もなく、お父さんがそのうちへあからだ。ジェニーはふと、おとなりはどんな人たちだろうと思ってみたりした。おいたともいなかったともいわなかった。だけど、もちろんいるんでしょね。どの何人かいるものだわ。そうジェニーは考えた。どの家にも、というのはつまり、ラーキン家をのぞいて、という意味だけれど。ときどきジェニーは、いまみたいに、きょうだいがいなく

てつまらないと思うことがあった。大人数の家族は、いつでもじぶんよりのしくくらししているように思われた。みんなでけんかをしているときでさえも。

もちろん、道向こうの一家とは、知り合いになりたければなれるかもしれない。しばらくそんなばあいのことを思いめぐらしていたが、ジュニーはすぐその考えを投げだしてしまった。こう思ったのだ。むだだわ。そんなことを考えたって。どうせ、いつまでもここにいるわけではないんだもの。そのうえ、はじめての人とは、あまり親しくなりすぎないほうがいいのよ。ごたごたがずいぶんはぶけるんですもの。

「ひとりでいれば、けんかにならないわ。」

これは、お母さんがいつもいうことだ。

「じぶんのことだけしていなさい。そうすれば人におせっかいをされなくてすみますからね。」

お母さんのおおせのとおりだ、とジュニーは思った。お母さんのいうことは、たいていのばあい正しい。けれども、ときどき、このお母さんのおすまし屋がなんとなくよくないように感じられることがあった。すくなくともそれではあまりさびしすぎる。たとえば、階段に腰かけて、向かいの家をただぼんやり見ているいまがそうだ。いまなら、けんかの相手がいれば、たいくつしのぎに気がまぎれてうれしくらいなのだ。

とつぜん、ジュニーの落ちこんでいた肩がすっとあがり、なにかいいことがありそうだな、と青い目がぱっちりあいた。赤ちゃんをだいた小さい女の子が、ちょうどロメロさんの家から出てきて、いまラーキンの小屋のほうへ道を横ぎりはじめたのだ。しばらく、ジュニーはその子が近づくのを一心に見つ

